

■ 編集だより

編集後記

Archives of General Psychiatry が本年になって JAMA Psychiatry となった。その中に ART AND IMAGES IN PSYCHIATRY という企画があり、絵画や画家と精神医学との関連性について James C Harris による記事が連載されている。取り上げられた絵画は各号の表紙の絵としても用いられ、独特の文化的・芸術的な雰囲気を出している。その他の学術雑誌でも Am J Psychiatry では Images in Psychiatry という投稿ジャンルが設けられており、精神医学の視点から画像や絵画が論じられている。精神神経学雑誌においても 100 年前の掲載論文を紹介する企画の中で写真や図版が紹介されたが、わが国の精神医学の歴史の一端がよくわかる内容であったと思う。

ここで Archives of General Psychiatry の昨年 5 月号の記事 (Harris JC Unemployment. Arch Gen Psychiatry 60 (5): 445, 2012) において Ben Shahn (1898-1969) の絵画が論じられており、その中で世界大恐慌の米国にあって芸術家・写真家に対する当時の不況対策による支援を受けて描かれた絵であることが記されている。記事によるとルーズベルト大統領が行ったニューディール政策の 1 つに連邦美術計画 (Federal Arts Project) があり、5,000 人以上の芸術家が雇用され、200,000 以上の作品が生み出されたこと、FSA プロジェクトという農村支援プログラムの一環で写真家への支援で 80,000 以上の記録写真が撮られたとのことである。このような働きがその後の米国の文化・芸術部門の隆盛につながっていったという史実もあるが、当時 Ben Shahn により描かれた Unemployment (失業) という画題の絵画では、失業に伴う、心理的な葛藤や抑うつ状態ではないかと思われる複数の労働者の切実な表情が描出されており、絵という音や声を出さない媒体ではあるが雄弁に失業対策の必要性を語っているように思えた。当時の不況対策ではあったが、これらの支援によって現実の社会の姿が絵画や写真によって切り取られ人々に共有されることに意味があるのではないかと感じた。

このような記事から、思考や感情、感覚を含めた精神活動に理解のためには人間のもつ様々な優れた側面、例えば文化的・芸術的な成果を生み出す力への敬意を抱きつつ、困難な状況での苦痛や悲哀を表現する言葉や様々な事象に謙虚な眼差しを向け、耳を傾けることで得られた貴重な情報について、可能であれば広く共有するような方向性が精神医学の視点でも大切ではないかと思えた。

ヘレン・ケラーは「Three Days to See」というエッセイの中で次のような文章を残している。「盲目の私から目の見えるあなたがたに一つのヒントをさしあげることができます。明日、あなたの目が急に見えなくなるかのように、あなたの目をお使いになっては如何でしょう？ 他の感覚にも同じことが言えます。声の音楽を、山鳥のさえずりを、オーケストラの力強い調べを、明日から聞こえないものとして、きいてみましょう。明日からは触感がなくなるとして、さわりたいものを一つ一つさわってごらんください。明日からはにおいも味も分からなくなるのだと、花の香りをかぎ、一口のごちそうも味わうことです。こうしてどの感覚も最大限に用い、あらゆる姿の美と喜びをたたえようではありませんか。」

日常診療の中で患者さんの訴えを聞いていると、この生き難き社会の中にいることの辛さや痛みの訴えが中心になっていることに気付くことがよくある。精神科臨床においては心の眼を、あるいは心の耳を用いて人々の発する言葉や情報について感性をもって受け止めていくこと、それは風景画家が感覚を研ぎ澄まして森の木々を描くことに匹敵するような豊かな感受性が必要と考えられる。人間社会の様々な活動の成果を精神医学に適用し、応用する視点とともに、その成果をより誠実に社会に還元することが精神医学の研究においても望まれるが、さらに敷衍すると得られた有用な知見が困難な時代を生きていく上でヒントを与える可能性を信じたいとも思う。

谷井久志